

FD 推進助成（乙）事業〔グループ FD 推進事業〕

## **VII. 平藤喜久子教授（神道文化学科）**

## 令和5年度「FD推進助成（乙）グループによるFD推進事業」申請書

提出日：令和5年1月12日

申請者氏名 (所属／職名)	平藤喜久子（神道文化学部神道文化学科／教授）
事業名	宗教文化教育の方法及び教材に関する研究
実施形態	神道文化学部神道文化学科 ※どちらかを選択してください
共同研究者氏名 (所属／職名)	黒崎浩行（神道文化学部／教授）、加瀬直弥（神道文化学部／教授）、 弓山達也（神道文化学部／兼任講師・東京工業大学教授）、山中弘（神道文化学部／兼任講師・筑波大学特命教授） ※共同研究者全員の氏名・所属・職名を列記してください

事業の概要（計画期間全体）（各400字程度）
<p><b>○目的：事業の目的</b>  授業の質の向上をめぐるは、オンライン授業におけるマルチメディア教材やLMSの利用方法、メディアリテラシーの向上といった他の授業科目とも共通する課題のほかに、学問領域ごとに固有の課題もある。宗教文化に関わる授業については、信仰を扱うことから起こる特有の問題がある。学生への宗教施設、宗教教団の現地踏査の方法の指導や、個人を対象とした場合の信仰に関する調査方法なども挙げられる。こうした課題への対応は、これまで基本的には教員個人の能力、資質に委ねられてきたが、多くの科目を担当し、多様な学生の関心に応じていく上で、教員個人では対応できないことも増えている。神道文化学部では、令和四年度より中期五カ年計画のなかに宗教文化教育の充実が組み入れられている。このことを契機に教員間の連携を学部、大学を越えて深め、広く授業実践の方法や課題の共有について検討を行い、具体的な教材作成に関する知識、技術の向上を</p> <p><b>○内容：目的を達成するために、どのような事業を実施するのか。</b>  申請者は、すでに2010年より、「宗教と社会」学会で「宗教文化の授業研究プロジェクト」を立ち上げ、大学を越えて宗教文化に関わる研究者が授業実践についての情報交換を行い、海外大学の事例検討、フィールドワークなどをしてきた。また、基盤研究B「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）では、教材としての写真や映像に関する研究会も同プロジェクトと連携をして行った。研究協力者の方々とともに、日本における宗教文化教育の質的向上を目指して設置された宗教文化教育推進センター（以下CERC）の運営にも関わっている。これらすでに関係を築いてきた学会プロジェクト、CERCに加え、申請者および研究協力者の黒崎浩行が兼担教授を務める研究開発推進機構日本文化研究所とも連携しつつ、次の3つの事業を行う。1）宗教文化の授業研究会の実施（事例検討）、2）教材作成（写真、映像）に関する研究会（技術向上）、3）他大学の授業調査（課題検討）</p> <p><b>○計画：どのような計画で、当該事業を実施するのか。</b>  宗教文化教育推進センター、「宗教と社会」学会、研究開発推進機構日本文化研究所と協力し、下記の事業を実施する。  1）宗教文化の授業研究会の実施：研究協力者と相談の上、宗教文化に関する授業を行っている外部の講師を招き、令和5年度5月、7月、11月に実施する。Zoomなども活用し、海外の事例なども取り上げていく。  2）教材作成（写真、映像）に関する研究会の実施：宗教文化に関わるテーマで撮影を行っている写真家や映像作家の方々を招き、撮影対象が宗教文化に関わる場合の注意点を含め、教材作成の技術に関わる内容についてレクチャーをお願いする。令和5年度8月、1月に実施する。  3）1）の研究会の内容を踏まえ、宗教文化の授業の質向上に組織として取り組んでいる学科、専攻の調査を行い（東北大学か九州大学を想定している）、教員たちとの情報交換を行う。令和5年度2月に実施予定。</p>

○役割分担：申請者と共同研究者の役割をそれぞれ明確に示してください。

申請者

平藤喜久子：海外の大学における日本の宗教文化に関わる授業実践の課題検討、および全体の統括。

研究協力者

黒崎浩行：神道文化およびフィールドワークに関わる授業実践の課題検討

加瀬直弥：神道文化に関わる授業実践の課題検討

弓山達也：教派神道、新宗教、スピリチュアリティ文化に関わる授業実践の課題検討

○点検・評価：本事業の実施状況並びに成果をどのように点検・評価するのか。

本事業の成果については、申請者や研究協力者が会員となっている「宗教と社会」学会などで研究発表（パネルセッションなど）を行い、学術的な観点からの評価を受ける。

また、神道文化学部の中期五カ年計画では、令和4年度、5年度の行動計画として、「授業担当者、研究開発推進機構、CERC、宗教学関連学会による、共生社会に求められる宗教文化の知、教育のあり方について情報共有を行う基盤を整備する。」を掲げている。本事業は、まさにこの行動計画の一翼を担うものであるため、神道文化学部の自己点検においても点検、評価が行われる予定である。

○改善：今後の本学学士課程教育の教育改善にどのように役立つことが想定されますか。

神道文化学部では、学部生及び副専攻の宗教文化プログラム履修の学生も含め、日本や世界の宗教文化の歴史や現状についての知識を学んで視野を広げ、その知を多文化共生社会の中で生かすことができる人材として育成することを目標として掲げている。そのために日本の宗教文化のみならず、世界の宗教文化についても学ぶことができるカリキュラムとなっている。しかし、各授業担当者同士の連携や情報交換、知の共有は十分になされているとはいえない。昨今、宗教が社会問題として取り上げる機会が増え、「宗教リテラシー」の必要性が求められる中、教員の知識のアップデートや視野を広げることは喫緊の課題であろう。本事業は、研究会を学部教員だけでなく兼任教員、連携する学会やCERCに関わる教員に向けても開くことで、広く教えるものの授業技術、宗教リテラシーの向上に資するものとする。

○経費の妥当性・必要性

本事業の中核は、研究会を通して宗教文化教育の授業の質の向上を目指すこと、またそのために他大学の宗教文化教育の授業実践や取り組みを調査することである。そのため、研究会の講師謝金と旅費が中心となる。

研究会については、講師謝礼は3万円とし、1) 宗教文化の授業研究会については、一回の研究会で1名を招聘し、じっくりと事例検討を行う。そのため、1名3万円×3回=9万円の予算を計上している。2) 教材作成（写真、映像）に関する研究会については、多様な学びを目指すため、1回の研究会に2名を招聘する。3万円×2名×2回=12万円とする。調査については、課題検討を踏まえて実施するため、調査先は未定である。仮に最遠方となる福岡（九州大学）に最大人数（申請者、研究協力者）で赴くものとして、交通費1人50000円+宿泊費12000円×5名=310,000円を計上する。事業の進行状況によっては減額補正を行うものとする。

本申請書の  
作成担当者

平藤喜久子（神道文化学部学部神道文化学科／教授）

**令和5年度「FD推進助成（乙）グループによるFD推進事業」申請書  
所要経費内訳明細表**

課 題 名		宗教文化教育の方法及び教材に関する研究	
教育研究経費支出内訳			
小 科 目	積 算 内 訳		
	主 な 使 途	金 額	明 細 ( 品 名 ・ 仕 様 等 )
消 耗 品 費 (1個又は1組の価格 が3万円未満)		0 円	
用 品 費 (1個又は1組の価格 が3万円以上20万円未 満)		0 円	
図 書 資 料 費		0 円	
印 刷 製 本 費		0 円	
通 信 運 搬 費		0 円	
他 一 般 旅 費	調査旅費	310,000 円	福岡出張1泊2日5名
賃 借 料		0 円	
手 数 料 ( 報 酬 )	講演会講師謝金	210,000 円	授業研究会1人3万円×3回、教材研究会1人3万円×2名×2回
労 務 委 託 費 ( 電 算 )		0 円	
労 務 委 託 費 ( )		0 円	
労 務 委 託 費 ( )		0 円	
計 (A)		520,000 円	
アルバイト関係支出（記入の仕方に注意）			
人 件 費 支 出		0 円	別紙（様式3）に記入のこと
計 (B)		0 円	
設備関係支出（1個又は1組の価格が20万円以上のもの）			
教育研究用機器備品		円	別紙（様式3）に記入のこと
計 (C)		0 円	
<b>所要経費 (A+B+C)</b>		<b>520,000 円</b>	

※以上ない科目等は、教育開発推進機構までご相談ください。  
 ※機器備品・用品の購入計画がある場合には、見積書・カタログ等購入計画物品を特定できる資料を添付してください。  
 ※大学のルール等により、申請した科目とは異なる科目への振替などが出来る場合があります。

## 令和5年度「FD推進助成（乙）グループによるFD推進事業」中間報告書

令和5年9月11日提出

事業申請者 (研究代表者)	(氏 名) 平藤喜久子 (所属・職名) 神道文化学部・教授	
課題名	宗教文化教育の方法及び教材に関する研究	

## ■事業の進展状況

令和5年4月から現在(9月末)までにおける当該申請事業の進展状況について、申請書に記載した「目的」「内容」「計画」「役割分担」を考慮しつつ、いつ、どこで、だれが、何を実施したかを考慮して、その概要を簡潔に説明してください(枠内書式自由)。

本研究は、神道文化学部における宗教文化教育の質を上げていくため、広く授業実践の方法や課題の共有について検討を行い、具体的な教材作成に関する知識、技術の向上を目指すものである。研究の内容は、宗教文化教育推進センター(CERC)、および本学の研究開発推進機構日本文化研究所と連携し、1)宗教文化の授業研究会の実施(事例検討)、2)教材作成(写真、映像)に関する研究会(技術向上)、3)他大学の授業調査(課題検討)を行うものである。各内容についての現在の進展状況を下記に述べる。

## 1) 宗教文化の授業研究会の実施(事例検討)：

研究会で報告を依頼する研究者の選定と打ち合わせを行った。報告を依頼しているのは次の三名である。

①井上まどか・清泉女子大学准教授「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの歴史・文化・宗教を授業でどう教えるか：日本からの物理的・心理的距離をふまえて」2023年10月12日に発表予定。

②Yazaki Saeko・グラスゴー大学宗教学部講師「イギリスにおけるイスラームの授業について」2024年1月

③Jean-Michel Butel・フランス国立東洋言語文化学院教授「フランスにおける日本宗教教育の現状」2024年1月

3人とは研究代表者がこれまでに打ち合わせを進めており、研究会の趣旨について理解を得ている。

## 2) 教材作成(写真、映像)に関する研究会(技術向上)

研究会の運営方法と宗教文化に関わるテーマで撮影を行っている写真家の方の紹介について、多摩美術大学教授で写真家の港千尋氏と相談を行った。研究会は10月、1月に実施する予定で決まった。

## 3) 他大学の授業調査(課題検討)

研究協力者の黒崎浩行・神道文化学部と平藤で、調査先について検討を行い、九州大学と東北大学に二手に分かれて調査に行く方向で検討を行っている。計画書では2024年2月に実施予定としているが、二手に分かれることを前提に、なるべく早い段階での調査実施を計画することとした。

## ■事業に関する変更点

現在までの進展状況から、申請書に記した「計画」「役割分担」「点検・評価」「改善(期待される効果)」に変更が生じる見込みであれば、その理由とどのような変更を見込まれるかについて簡潔に記述してください(枠内書式自由)。

計画、役割分担等について変更はないが、実施時期については、学外の発表者の都合等により変更が生じている。

## 1) 宗教文化の授業研究会の実施(事例検討)

計画書では2023年5月、7月、11月としていたが、発表者の都合、来日の予定が変更になった関係で、10月、1月(もしくは2月)となった。

## 2) 教材作成(写真、映像)に関する研究会(技術向上)

登壇者の都合で8月、1月の予定を10月、1月に変更する。

## 3) 他大学の授業調査 (課題検討)

研究協力者も含めた5名で東北大学か九州大学の予定であったが、日程調整も難しいことから、なるべく早い段階で少人数で2箇所とも調査に伺うこととした。

## ■経費の執行状況 ※いずれかに○を付けて「その理由」を記述してください

当初計画通りの見込み

減額補正を申請する見込み

\* その理由 (減額補正を申請する場合、必ず記入してください)

## 令和5年度「FD 推進助成（乙）グループによる推進事業」事業報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

事業名	宗教文化教育の方法及び教材に関する研究
実務担当者名	平藤喜久子
事業の概要	
<p>○目的</p> <p>授業の質の向上をめぐるには、オンライン授業におけるマルチメディア教材や LMS の利用方法、メディアリテラシーの向上といった他の授業科目とも共通する課題のほかに、学問領域ごとに固有の課題もある。宗教文化に関わる授業については、信仰を扱うことから起こる特有の問題がある。学生への宗教施設、宗教教団の現地踏査の方法の指導や、個人を対象とした場合の信仰に関する調査方法なども挙げられる。こうした課題への対応は、これまで基本的には教員個人の能力、資質に委ねられてきたが、多くの科目を担当し、多様な学生の関心に応じていく上で、教員個人では対応できないことも増えている。神道文化学部では、令和四年度より中期五カ年計画のなかに宗教文化教育の充実が組み入れられている。このことを契機に教員間の連携を学部、大学を越えて深め、広く授業実践の方法や課題の共有について検討を行い、具体的な教材作成に関する知識、技術の向上を目指すものである。</p> <p>○内容</p> <p>すでに 2010 年より、「宗教と社会」学会で「宗教文化の授業研究プロジェクト」を立ち上げ、大学を越えて宗教文化に関わる研究者が授業実践についての情報交換を行い、海外大学の事例検討、フィールドワークなどをしてきた。また基盤研究 B「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）では、教材としての写真や映像に関する研究会も同プロジェクトと連携をして行った。研究協力者の方々とともに、宗教文化教育の質的向上を目指して設置された宗教文化教育推進センター（以下 CERC）の運営にも関わっている。これらすでに関係を築いてきた学会プロジェクト、CERC に加え、代表者の平藤および研究協力者の黒崎浩行が兼任教授を務める研究開発推進機構日本文化研究所とも連携しつつ、下記の計画に述べる 3 つの事業を行う。</p> <p>○計画</p> <p>1) 宗教文化の授業研究会の実施</p> <p>2023 年 10 月 23 日、2024 年 2 月 16 日、2024 年 2 月 26 日の 3 回にわたって、当初の計画通り研究会を実施した。</p> <p>2) 教材作成（写真、映像）に関する研究会</p> <p>2024 年 1 月 11 日に一度実施した。計画では 2 回行うこととしていたが、登壇者の都合もあり、2 部構成として、2 回分の内容を 1 度にまとめた。</p> <p>3) 他大学の授業調査</p> <p>2024 年 1 月 29 日、30 日に研究代表者、協力者計 5 名で東北大学文学部宗教学講座を訪問し、情報交換を行った。</p>	

## 事業の結果

【目的】年初計画で設定した目的は達成できましたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック）

■十分達成できた □若干の計画修正の上達成可 □大幅な修正の上達成可 □達成できない

【内容】年初計画で設定した事業内容は適切でしたか？（いずれかにチェック）

■適切であった □概ね適切であった □あまり適切でなかった □適切でなかった

【点検・評価・共有】点検・評価を行い、その結果を学部教員全員で十分に共有・検討しましたか？

■十分な点検・評価・共有ができた □一定の点検・評価・共有ができた

□点検・評価・共有のどれかが不十分であった □点検・評価・共有のほとんどが不十分であった

### 【目的】

本事業では、神道文化学部における宗教文化教育の充実のため、教員間の連携を学部、大学を越えて深め、広く授業実践の方法や課題の共有について検討を行い、具体的な教材作成に関する知識、技術の向上を目指すことを目的とした。この目的のため、共同研究者には、弓山達也（神道文化学部／兼任講師・東京工業大学教授）、山中弘（神道文化学部／兼任講師・筑波大学特命教授）の2名に加わっていただいた。共同研究者は、研究会や東北大学での調査にも参加した。また、3回行われた宗教文化の授業研究会では、1回目の井上まどか・清泉女子大学准教授、2回目の矢崎早枝子・グラスゴー大学専任講師、3回目の山中弘・筑波大学特命教授が講演をされた。いずれも他大学の教員である。研究会には、さまざまな大学の研究者が参加しており、教員間の連携を学部、大学を越えて広めることができた。教材作成の知識、技術の向上に関しても、宗教的なテーマに取り組む写真家を迎えたことで、実用的な知識、技術の獲得をすることができた。

### 【内容】

1) 宗教文化の授業研究会の実施

○第1回：2023年10月12日

井上まどか・清泉女子大学准教授「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの歴史・文化・宗教を授業でどう教えるか：日本からの物理的・心理的距離をふまえて」

参加者17名

○第2回：2024年2月16日

矢崎早枝子・グラスゴー大学専任講師「いま、イスラームをイギリスで教える」

参加者25名

第3回：2024年2月26日

山中弘・筑波大学特命教授「神道文化学部でキリスト教を教える」

参加者：40名

2) 教材作成（写真、映像）に関する研究会の実施

2024年1月11日

講演：港千尋（写真家・多摩美術大学教授）「写真回帰論」

コメント：岩井洋（帝塚山大学教授）

第2部 写真検討会

講師：伊奈英次（写真家・東京総合写真専門学校 校長）、甲斐啓二郎（写真家）、港千尋

参加者：30名

3) 1) の研究会の内容を踏まえた調査。

2024年1月29日、30日東北大学文学部宗教学研究室訪問調査。

参加者：平藤喜久子、黒崎浩行、加瀬直弥、弓山達也、山中弘、東北大学側：木村敏明教授、谷山洋三教授、問芝志保准教授

○時期等の変更などがあったが、予定通りの内容を実施することができた。その背景には、これまでの学会プロジェクトや科研費事業、日本文化研究所、CERCでの実績と研究者間の交流が行われてきたことが大きい。

### 【点検・評価・共有】

2024年2月26日の宗教文化の授業研究会のあと、当日の研究会の講演者でもあった山中弘・筑波大学特命教授を囲み、神道文化学部の教員有志で懇談会を実施し、これまでの研究会の内容の振り返りや東北大学調査の内容の報告を行い、問題意識の共有を図ることができた。

## 今後の展望

【改善・期待される効果】本事業で得た知見は、今後の当該学部の教授法や授業改善に効果的であるか？

■とても効果的である □効果的である □あまり効果的でない □効果的でない（いずれかにチェック）

### 1) 宗教文化の授業研究会

第1回目の井上まどか氏の講演では、実際に授業でどのように教えられているかが、授業時に使用するスライドとともに紹介された。そのスライドは、研究会の参加者が今後の授業で使用できるよう提供された。キリスト教に関する授業だけでなく、紛争地域の宗教文化についてどのような歴史的な背景を伝えていくべきかという点でおおいに参考になった。第2回目の矢崎早枝子氏の講演では、イギリスの大学におけるイスラモフォビア、反ユダヤ主義をめぐる状況などが詳細に紹介され、そのなかで授業運営をどのように行っているか報告された。とくにディスカッションを重視していることや、イギリスの大学で「反ユダヤ主義」に関わるとされる言説が学問の自由との関わりのなかで大きな問題になっていることなど、今後の日本の状況の参考になると考える。第3回目の山中弘氏の講演では、本学で20年にわたって兼任講師としてキリスト教文化研究の授業を担当した経験について、シラバスの内容や授業で使用した動画教材の紹介などを交えながら報告された。高校までに習う世界史の知識との接続が、学生の関心をおおいに呼び起こすことや、宗教社会学の学説と現代社会におけるキリスト教をめぐる問題のつなげ方など、ほかの授業にも援用しうるものであった。

### 2) 教材作成（写真、映像）に関する研究会の実施

登壇者の都合もあり、2回の予定を1回としたが、第1部では、港千尋氏により、画像、映像メディアの歴史と今後の展望が論じられ、岩井洋氏により宗教的な対象を撮ること、記録する、記憶することについてコメントが述べられた。オンラインでは台湾芸術大学の大学院生たちが聴講し、写真、映像というメディアと教育をめぐる議論が国を越えて関心を持たれることがわかった。第2部では、参加希望者から事前に「失敗写真」「もっとよくしたい写真」を募り、それらを閲覧しながら、伊奈氏、甲斐氏、港氏という写真家の方々にアドバイスをしてもらった構成とした。実際に授業や論文で使いたい写真をどのようにしてよりよくするか、ある程度は画像加工ソフトが必要であることなど、きわめて実践的な内容となり、参加者からはまたこのような機会がほしいという声が上がった。

### 3) 1) の研究会の内容を踏まえた調査。

宗教文化教育という視点からの授業に以前から熱心に取り組んでいた東北大学で、現在の教育状況、方法、フィールドワーク先のことなど、詳しく教えていただき、ディスカッションを行った。とくに宗教学実習では、写真、動画の撮影を義務付け、地元の写真家による講義も行われているとのことで、思いがけず2)で行った研究会の内容とリンクする部分もあった。臨床宗教師の資格制度にも取り組んでおり、宗教の学びの社会還元について、どのように学部で考えていくかという点で、大いに参考になると思われる。

【汎用性・波及効果】本事業で得た知見は、学部学科を超えた本学学士課程教育全体または教員の職能改善に効果的であるか？

■とても効果的である □効果的である □あまり効果的でない □効果的でない（いずれかにチェック）

本事業は、「宗教」という信仰に関わるテーマを授業で扱う際に起こる特有の問題について、宗教文化に関わる研究者が学部、大学を越えて深め、広く授業実践の方法や課題の共有について検討を行い、具体的な教材作成に関する知識、技術の向上を目指すものである。そのため、学内では神道文化学部だけではなく、研究開発推進機構の研究者も研究会に積極的に参加をした。その意味で、学部を越えた効果があると考え

最近、国内の宗教と政治、カルト問題があり、国際的にもイスラエルによるパレスチナ攻撃など、宗教の文脈で語られる事件が多く、宗教に関わる教育を行う大学にとって「宗教リテラシー」の醸成は社会的な使命といえる。本事業ではその点を強く意識し、ウクライナ問題があるなかでのロシア正教の教え方、パレスチナ攻撃が行われているなか、当事者もいる空間でのイスラームの教え方を取り上げた。研究会には若手の研究者も多く参加しており、神道文化学部を越え、広く宗教文化に関わる授業を行う研究者のリテラシーの向上に資することができたと認識している。

【経費の執行】経費の執行は、執行計画表に基き執行時期・費目別執行率とも適切でしたか？

計画では、次のような経費執行を予定していた。

1) 宗教文化の授業研究会

1名3万円×3回=9万円

2) 教材作成(写真、映像)に関する研究会

3万円×2名×2回=12万円

3) 調査

最遠方となる福岡(九州大学)に最大人数(申請者、研究協力者)で赴くものとして、交通費1人50000円+宿泊費12000円×5名=310,000円

合計 520000円

実際の執行は下記の通りとなった。

1) 宗教文化の授業研究会

1名3万円×3回=9万円←予定通り

2) 教材作成(写真、映像)に関する研究会

講演と写真指導1名 5万円

コメント1名 2万円

写真指導2名×2万5千円=5万円

合計12万円←予定通り

3) 調査

調査地が東北大学となった。中間報告書では、九州大学と東北大学の2手に分かれていくとしていたが、九州大学の研究者との調整がつかなかったため、東北大学に5名で赴くこととなった。また、一名が校務のため日帰りとなった。以上の理由により、計画の段階よりは減額となっているが、適正な支出である。

宿泊費 44,000円

日当 28200円

交通費 114520円

合計186720円←123280円の減額

**合計396720円 執行率 76.3% \* 予定していた事業はすべて完遂している**

【成果報告会】成果報告会の内容(説明事項、共有事項、問題提起等)について現時点での概要をお書きください。

○説明事項、共有事項

①事業の目的について

本事業を構想するにいたった経緯や必要とされる背景。

②行った研究会の報告

宗教文化の授業研究会1回目~3回目までの内容について、使用されたスライドなどをもとに紹介し、得られた知見などを述べる。

教材作成(写真、映像)に関する研究会については、講演の内容および写真指導が求められた研究者の写真を紹介しながらどのようなアドバイスがあったかを述べる。

③調査の報告

東北大学の調査でどのような議論があったのか、使用している教材の紹介や調査先のことなどを述べる。

○問題提起

研究会は、本事業の経費があったからこそ実現したもので、単年度限りとなる。しかしながら、宗教文化に関わる授業内容の共有や教材作成に関わる写真技術の向上は、継続的に行ってほしいという声が多く聞かれた。その点について最後に提起することとしたい。

# グループFD「宗教文化教育の方法及び教材に関する研究」報告

2024年3月

平藤喜久子

神道文化学部

1

## 事業の目的・背景

- 1990年代、宗教教育、教育における宗教の取り扱いについて論じられるようになる。とくに1995年のオウム真理教は、大学における宗教の教育に大きな課題を与えた。
- 2000年代以降、グローバル化、多文化共生社会という現状を踏まえた宗教教育の必要性が広く議論されるようになった。2006年に改正された教育基本法の第十五条第1項では「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない」と定められた。「宗教に関する一般的な教養」とは、この改正で新たに付け加わった文言。グローバル化が進み、国内外で日本人が多様な宗教文化と関わる機会が増えるなか、宗教を学ぶことの必要性が認識されてきたことのあらわれといえよう。
- こうした社会的要請を背景に、2011年には宗教学関連の学会が中心的母体となり、宗教文化教育推進センター（CERC）が置かれ、宗教文化士という資格制度が誕生した。CERCの事務局は、本学の日本文化研究所に置かれ、神道文化学部では、2022年度より中期五カ年計画のなかに宗教文化教育の充実が組み入れられるなど、本学は日本の大学における宗教文化教育の中心的な場となってきている。
- また、近年では、統一教会問題をきっかけとして「宗教リテラシー」教育の重要性がさらに認識されることとなっており、宗教文化教育への社会の期待は高まっている。

2

## 宗教文化教育の難しさ

- 宗教文化の授業を運営していくにあたっては、教室で「信仰」を取り扱うということから特有の問題が生じる。また、授業は、必ずしも教員の狭い意味でも専門領域だけを教えるわけではなく、広い内容を含む場合が多い。
  - カルト問題
  - 宗教二世
  - 戦争と宗教（ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエル）
- そのため、宗教文化に関わる授業を行っている研究者同士の情報交換が重要な意義を持つ。

3

## これまでの取り組み

- **1990年** 國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトの開始（國學院大學日本文化研究所編 井上順孝責任編集(1997)『宗教と教育 日本の宗教教育の歴史と現状』（弘文堂））
- **1995年～2020年** 國學院大學日本文化研究所および「宗教と社会」学会による「学生宗教意識調査」の実施
- **2010年** 「宗教と社会」学会、プロジェクト「宗教文化の授業研究」プロジェクト
  - 宗教文化に関わる授業実践について、国内外の研究者が情報交換を行う。
    - カルト問題、宗教調査、エジプトの日本宗教教育、アメリカの日本宗教教育、イギリスの日本宗教教育、仏教の教え方、研究倫理など
- **2017年** 基盤研究B「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）
  - 授業研究の取り組みから、教材の共有化、質の向上が課題として浮上したため、写真や映像についての研究会を実施
- **2022年度より**、神道文化学部として宗教文化教育の充実に取り組むこととなったため、これらの成果は、学部として展開させる必要があると考えた。

4

## 本事業の取り組み

- 1) 宗教文化の授業研究会の実施
- 2) 教材作成（写真、映像）に関する研究会
- 3) 他大学の授業調査

5

## ロシア・ウクライナ・ベラルーシの歴史・文化・宗教を授業でどう教えるか：日本からの物理的・心理的距離をふまえて

「宗教文化教育の方法及び教材に関する研究」共同研究  
2023年10月12日 18:00～ 於：国学院大学

発表者：井上まどか（清泉女子大学）  
e-mail: madoka@seisen-u.ac.jp

6

いま、イギリスでイスラームを教える  
グラスゴー大学の事例

國學院大学

2024年2月16日

矢崎早枝子（グラスゴー大学）

7



8

## photography in the future

- **chihiro minato 11.01.2024**

9

## 東北大学調査

- 参加者：平藤喜久子、黒崎浩行、加瀬直弥、弓山達也、山中弘、東北大学側：木村敏明教授、谷山洋三教授、問芝志保准教授
- 東北大学宗教学研究室の特徴
  - 宗教学実習（フィールドワーク）を単位（4）として実施
    - ←コロナ禍での新たな取り組みはどのようなものか
  - 宗教文化士制度に取り組む
    - ←神道文化学部と共通の目的を有する
  - 臨床宗教師の資格を取れる仕組みを導入
    - ←社会的要請に宗教学がどうこたえていくのか

10